

善行に対する警告と奨励 (1)「施し」

【聖書箇所】 マタイの福音書 6章 1～4節

ベレーシート

●イエシュアが公生涯において宣教を開始されたときのメッセージは、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」というものでした。このメッセージは、私たちが考える以上の、想像をはるかに越えるような内容であり、そのメッセージを聞く私たちに必然的な危機をもたらすほどのものです。「悔い改めなさい。」とは、神に立ち返ること、神に向きを変えることを意味しますが、それはすべての事柄を神の視点から考え、見直すことを意味しています。つまり、これまで教えられてきた既成概念や伝統を、あるいは自分の経験に基づくパラダイム(=ものの見方や考え方の枠組み)を、神中心にシフト(転換)することを意味するのです。特に、天の御国(神の国)の概念は、「神が人とともに住む」という神の永遠のご計画とみこころ、御旨とその目的の啓示を含んでいます。神は、私たちが旧約聖書と呼んでいる「律法と預言書と詩篇」を通して啓示してきたことの最終的な仕上げとして御子を遣わされました。御子イエシュアこそ御国の王であり、ご自身の御国の民を建て上げるために来られたのですが、その際に、神のご計画に対して立ちはだかる多くの問題と、修正されるべき多くの事柄がありました。そうしたひとつひとつの事柄を、イエシュアは御国の視点から人々に教える必要があったのです。

●「御国の福音」とは神のマスタープランの成就によってもたらされるものです。それは、神と人とがともに住む「家」(「バイト」 בית)の概念の原点である「エデンの園」(創世記 2章)の回復とも言えるのです。「御国の福音」は、神の御子イエシュアの初臨によって成し遂げられた十字架の死と復活に基づく「神の恵みの福音」(和解の福音)を包み込みながら、やがてイエシュアの地上再臨によって実現するメシア王国(千年王国)、そして最終ステージである天から降りてくる「新しいエルサレム」(黙示録 21～22章)という永遠の御国をも射程に入れた、聖書全体(初めから終わりまで)を貫いている神のヴィジョンの実現によってもたらされる福音です。それがイエシュアの教えとわざ(奇蹟)のひとつひとつに啓示されているのです。新約聖書の福音書と使徒たちの手紙は、まさにそのあかしの書と位置付けることができるのです。

●さて今回は「山上の説教」の新たな段階へと進みます。その前に、6章が「山上の説教」においてどのようなコンテキストの流れの中にあるかを見ておきたいと思います。

(1) 御国に住む者たちの「特性」(5:3～12)

●5章の「心の貧しい者は幸いです」で始まる箇所(5:3～12)では、御国がどのような人々によって成り立っているかが教えられています。つまり、「心の貧しい者」「悲しむ者」「柔和な者」「義に飢え渇く者」「あわれみ深い者」「心のきよい者」「平和をつくる者」「義のために迫害されている者」たちです。

(2) 御国に住む者たちの「地的役割」(5:13~16)

●次にそうした神の民が地においてはどのような役割を果たし得るのか。それが「塩」と「光」という二つの比喻によって教えられています。「塩」は神との専心的な親しいかわりを意味し、「光」は神のご計画の全体を知ることの意味します。そうした役割を十分に地において果たすべきことを教えています。

(3) 御国における憲章であるトーラーを成就すること(5:17~19)

●イエシュアが来られた時代には、神の律法の解釈がパリサイ人や律法学者たちの口伝律法によって歪曲されていました。イエシュアはその歪曲を正すため、具体的に六つのタブレット(殺人、姦淫、離婚、誓い、報復、愛敵)を取り上げ、神の律法の本来の意味を教えられました。そして最後に、「あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」(5:48)と結んでいます。「完全でありなさい」という意味は、道徳的に完全であるという意味ではありません。前回学んだように、「完全な」と訳されたギリシア語は「テレイオス」(τέλειος)ですが、ヘブル語では「シャーレーム」(רוּץ)ということばです。このことばは神の子とされた者が初歩的な乳飲み子でとどまることなく、堅い食物を食べることのできる「十分に成長した」「成熟した」「円熟した」「成人した」者となり、神のご計画とみこころを十分に知ることの完全さを意味しています。

(4) 御国の民の義が律法学者やパリサイ人の義にまさるものとする(5:20)

●御国の民の義が律法学者やパリサイ人たちの義にまさるものとするために、イエシュアは6章前半(1~18節)において、当時のユダヤ人たちが大切にしていた宗教的善行の三本柱である「施し」「祈り」「断食」を取り上げ、彼らのしている善行は偽善であることを教えようとしただけでなく、真の善行とはいかなるものであるかを明らかにしようとしています。今回は、ここで取り上げられている宗教的善行の三つのタブレット全体の特徴を取り上げ(6:1)、三つうちの最初のタブレットである「施し」について取り上げたいと思います(6:2~4)。



1. 宗教的善行の総括的序言

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書6章1節

人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。

そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。

●6章1節は、続く2~18節にある三つの宗教的善行(「施し」「祈り」「断食」)全体の総括的序言です。まずは、そこにあるいくつかの重要な語彙に注目してみましょう。

(1) 「善行」

●「善行」と訳されたギリシア語は、「義」を意味する「デカイオスナー」(δικαιοσύνη)と、「行なう」を意味する動詞「ポイエオー」(ποιέω)の不定詞が合わさったことばです。ここでの「義」は人間の基準ではなく、神の基準に基づく「義」です。ヘブル語では「ツエダーカー」(תְּדָרָקָר)です。申命記 24 章には神の言われる「義」(「ツエダーカー」תְּדָרָקָר)について、以下のように記されています。

【新改訳改訂第3版】申命記 24 章 10～13 節

- 10 隣人に何かを貸すときに、担保を取るため、その家に入ってはならない。
- 11 あなたは外に立っていなければならない。あなたが貸そうとするその人が、外にいるあなたのところに、担保を持って出て来なければならない。
- 12 もしその人が貧しい人である場合は、その担保を取ったままで寝てはならない。
- 13 日没のころには、その担保を必ず返さなければならない。彼は、自分の着物を着て寝るなら、あなたを祝福するであろう。また、それはあなたの神、【主】の前に、あなたの義となる。

●神である主の前に義となる行為というのは、上記のように振る舞うことなのです。つまり、貸し借りの関係において神の律法が求めているのは、相手に対する慈善(「ヘセド」חֶסֶד)の行為、すなわち、愛の行為が優先するのです。このことが主の前に、「あなたの義」となるのです。「あなたの義となる」という表現は旧約聖書ではこの箇所だけです。その「義」(「ツエダーカー」תְּדָרָקָר)の現われの一つとして、「施し」(「ヘセド」חֶסֶד)があるのです。「義の行為」が、人々からの称賛を得ようとして人々に見せるためにそれがなされる時、神からの報いはなくなってしまうのです。なぜなら、その善行は「あなたの神、【主】の前に、あなたの義となる」ことがないからです。

●パリサイ人や律法学者たちの善行は、神の御前においてなされるのではなく、人にそれを見せることで、人からの称賛と評価を求めていました。それは神の目から見れば、到底、「義」とは見なされない行為でした。なぜなら、神からの栄誉を受けるよりも、人からの栄誉を求める行為であったからです。それゆえイエシュアは、1 節で「人に見せるために人前で善行しないように気をつけなさい」と弟子たちに厳しく警告しているのです。「善行」が否定されているのでは決してありません。それを人前ですることによって、人からの評価と栄誉を求めようとしていたことをイエシュアは問題視しているのです。

(2) 報い

●「報い」と訳されたギリシア語は「ミスソス」(μισθός)で、この「報い」は人からのものと、天の父からのものがあります。人前で善行するなら人からの評価や称賛が与えられますが、天の父からの「報い」は受けられないとイエシュアは教えています。ところで、天におられる父からの「報い」とはいったいどのような報いなのでしょう。そのことを考える前に、「報い」(ご褒美)ということばについて考えてみたいと思います。マタイの福音書で最初に登場するこの「報い」ということばは、山上の説教の中で二回使われていました。その最初の箇所は 5 章 12 節です。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 5章 12節

喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。

- 「天ではあなたがたの報いは大きいから」とあります。ここでは「義のために迫害されている者」に対して語られた箇所です。「大きい」と訳された「ポルス」(πολύς)は、「数多く」「おびただしい」「はなはだしい」という意味です。つまり、尋常ではない「報い」が約束されているのです。旧約聖書で「あなたの報いははなはだ大きい」という神の約束を与えられた人物がいます。それはアブラムです。「報い」をヘブル語で「サーハール」(שָׂרָה)と言いますが、その初出箇所が創世記 15章 1節です。

【新改訳改訂第3版】創世記 15章 1節

これらの出来事の後、【主】のことはが幻のうちにアブラムに臨み、こう仰せられた。

「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」

- 「これらの出来事の後」とは、アブラムがエラムの王ケドルラオメル率いる連合軍と戦って、ソドムの人々と彼らの財産のすべてを取り戻した出来事です。このときアブラムは神の助けによって勝利しましたが、いつなるとき復讐されるかもしれません。そうした恐れがアブラムの心を支配していたと考えられます。そのようなときに主が現われて、アブラムに「恐れるな」と語られたのが創世記 15章 1節のことばでした。そして「あなたの受ける報いは非常に大きい」と約束するのですが、その報いについての内容はここにおいて何も記されておらず、あなたの受ける報いは「非常に大きい」とだけ語られています。「大きい」と訳されたヘブル語は動詞「ラーヴァー」(רָבַח)の不定詞ですが、数量的な意味で理解することができます。しかも「はなはだ」を意味する「メオード」(מְאוֹד)付きです。しかも、その報いは神を信頼することによってのみ約束されているものです。

- もう一つの箇所は 5章 46節です。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 5章 46節

自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。

取税人でも、同じことをしているではありませんか。

- 「何の報いが受けられるでしょう」という表現は、その報いが人から感謝される程度のものであり、天の父からの尋常ではない報いは受けられないことを暗に示唆しています。ここでも、「報い」の程度や質について語られてはいても、それがどんな内容の報いであるのかについては、一切語られていません。

(3) 「父からの報い」、それとも「父のもとにある報い」?

- 6章 1節をいくつかの聖書で見てください。

新改訳 「天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。」

新共同訳 「あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。」(フランシスコ会訳、岩波訳)

山岸訳 「お前たちの父の御前で、報いが受けられない。」

●どこが違うのかと言え、「父から」という訳と、「父のもとで」(父の御前で)という二つの訳に分かれます。これはギリシア語の前置詞「パラ」(παρά)をどう訳すかにかかっているのですが、報いの出処は明確です。それは「父」です。しかしここで問題となっているのは、「報い」が得られる時です。「受けられる」という動詞は一見受身形のように思われがちですが、そうではありません。ここでは「持つ、所有する」という意味の動詞「エコー」(ἔχω)の現在形が使われています。つまり、「・・・することに気をつけなさい。」(現在命令形)。「そうすれば、天の父からのご褒美が得られます。」(現在形)という約束です。ところが、「施し」のタブレット(4 節)、「祈り」のタブレット(6 節)、そして「断食」のタブレット(18 節)にある「隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」の場合の「報いてくださる」(「アパディドーミー」ἀποδιδωμι)はすべて未来形になっています。つまり、必ず「報いてくださるでしょう」ということです。

●ということは、天の父からの報い(ご褒美)を得られるのは現在でも可能であるし、あるいはまた将来に与えられることをも意味しています。そこで問題です。天の父からの「報い」の実体とはいったい何なのでしょう。しかもその「報い」は複数ではなく、単数だということです。しかも冠詞付です。そして、神の子どもにとって良いものであり、価値あるものです。……答えは「聖霊」です。

●「義の行為」によって、御父から、御父のもとで得られる報いとは聖霊のことです。なぜ、このような報いが与えられるのかと言え、それが隠れた父の御前でなされるからです。人に見てもらおうとして、人の前で善行をすることは、どこまでも自分のための行為、自己追求としての行為であり、そこには聖霊という報いは保証されないということです。この聖霊こそが、天にあるすべての祝福を私たちに啓示し、その豊かな栄光の中から一部ではなく、その栄光に従って(応じて)私たちに保証してくださる方なのです。主の御前でなされる善行は、人の目には隠されたものでなければなりません。主の御前における善行(慈愛の行為)は、人の目に隠されることによって、やがてその隠そうとしたものがより強烈に現わされてくるといふ実に不思議な御霊の働きの世界なのです。イエシュアが弟子たちを遣わされる時にこう言われました。「おおわれているもので、現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはありません。」と(マタイ 10:26)。

2. 「施し」について

●ユダヤ人が最も大切にしていた三つの善行のうちの最初のタブレットである「施し」に、目を向けてみたいと思います。

- 2 だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことにあなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。
- 3 あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。
- 4 あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

●この箇所は、「施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。」と警告しています。「自分の前でラッパを吹く」とは、自己顕示のたとえだという解釈もあれば、文字通り、神殿のある場所に設置されている献金を入れる器がラッパの形をしていて、そこにお金が投げ入れられるたびに大きな音がしたことから、この表現が出てきたとする解釈もあります。以前私は、ある方から、ルカ 21 章にある話で「ある貧しいやもめが、レプタ銅貨二つを投げ入れたことを、イエシュアはどうして分かったのですか」という質問を受けたことがあります。その答えは、お金が投げ入れられると音がする献金箱だったからと答えました。しかし後で考えると、そんなことよりも、二枚のレプタ銅貨が彼女の全財産であったことをイエシュアは知っていたということの方が驚きなのです。つまり、彼女の慈善の献金が神の御前では「全財産をささげた行為」として認められていたということなのです。イエシュアがここで問題視しているのは、貧しい者に対する愛の行為が自己顕示に転化する危険性を常に持っているということです。施しという善行が偽善的になってしまう危険性です。そもそも「偽善者」とは「役者」を意味します。「役者」は常に人の目を意識して演技をしているのが特徴です。主にある者は、人の目ではなく、神の目を意識しなければならないのです。

●また、「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。」という表現は何を意味しているのでしょうか。イエシュアの最後のさばきのたとえ話の中でほめられている人々が、「主よ。いつ私たちは・・・のことをしましたか。」と尋ね返しています(マタイ 25:37)。彼らは困った人に食物を与えたり、旅人をもてなしたり、病人を訪問したことを覚えていなかったのです。それは善行している自分を意識する余裕などないほどに相手に集中していたからだと言えます。このことが、「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。」という意味なのです。

●上記のような、施しが神に覚えられていたという例が新約聖書の中にあります。二人の人物を紹介したいと思います。一人は女性でイエシュアの弟子です。もう一人は男性で敬神者とされるユダヤ教に改宗した異邦人です。

(1) ヨツパのタビタ(ドルカス)の場合

●最初の例は、地中海に面した港町のヨツパに住んでいた**タビタ**という女性です。彼女はイエシュアの弟子でしたが、病気になって死にました(使徒 9:36~42)。彼女は生前やもめたちに対して多くの「良いわざと施しをしていた」とあります。ちなみに「タビタ」のヘブル語表記は「ターヴィーター」(תַּרְבִּיטָא)で、

良い、美しい女性を意味する「トーヴァー」(תּוֹבָה)に由来する名前です。事実、彼女は人のために自分の身をささげた女性でしたから、亡くなった時には多くのやもめから惜しまれたのです。しばしば人の価値は死んだときに分かると言われますが、まさに彼女がそうでした。ちなみに「タビタ」という名前のギリシア名は「ドルカス」で「雌のかもしか」という意味です。「かもしか」は聖書では神から愛されている者の象徴です。雅歌では「愛する者」のことを「かもしか」と呼んでいます。

●使徒ペテロがヨッパの近くの町のルダにいることを伝え聞いた弟子たちは、二人の者を送って、ヨッパに「すぐに来てください」とペテロに頼みます。ペテロはそれに応じ、到着すると、彼女のために祈り、彼女を死からよみがえらせました。このタビタの生き返り(よみがえり)の奇蹟はヨッパ中に知れ渡り、多くの人が主を信じることとなりました。「施し」と奇蹟的な出来事との間に、主の報いを予感させます。

(2) カイザリヤのコルネリオ(百人隊長)の場合

●御国の福音の門戸がユダヤ人から異邦人へと開かれようとするその境界線に、同じく地中海の港町に住む異邦人のコルネリオがいました。彼はイタリアの百人隊長でした。彼について聖書はこう述べています。「彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていた。」(使徒 10:2)と。彼のところに遣わされた御使いは、コルネリオに対して「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上って、覚えられています。」と語っています。

●使徒の働き 10~11 章には、使徒ペテロと敬神者のコルネリオとの出会いにおける神の不思議な導きが記されています。敬神者とはユダヤ教に回心した異邦人のことです。とはいえ、当時のユダヤ人にとって異邦人を受け入れることは容易なことではありませんでした。そのために、使徒ペテロは夢による主の特別な啓示によって異邦人を受け入れるべきことを示されたのです。そうした主の特別な導きの後で、彼らは出会い、福音が伝えられたことで異邦人にも聖霊の賜物が注がれたのです。この出来事は、「ユダヤの人々に多くの施しをなしていた」コルネリオに対する「天の父からの報い」と考えることができます。

●イエシュアは偽善的な施しをしないように弟子たちに教えると同時に、主の御前になされる「施し」には天の父からの「報い」があることを奨励しているのです。他者に対する愛の行為としての「施し」のギリシア語は「エレエーモスネー」(ἐλεημοσύνη)。ヘブル語は「ヘセド」(חֶסֶד)ですが、特に「ヘセド」は、困窮者に対する「施し」だけでなく、誰に対しても、また、人の益になることは何でも、「分け与えたり」「話をしたり、話を聞いたり」「親切にしたり」「助けの手を差し伸べたり」するなど、あらゆる領域における愛の行為を意味します。その意味において、使徒パウロが愛弟子のテモテに対して語った、「**人の益を計り、良い行いに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。**」(1テモテ 6:18)という勧めは、主にある私たちも心に留めるべきことではないでしょうか。隠れたところで行われる施しは、必ずや、神の報いとなって現わされるのです。